

「批判的実在論 **critical realism**」の特徴とその意義について

佐藤 春吉 (立命館大学)

「批判的実在論 (**critical realism**)」(略称CR)は、R. バスカーが提唱し、英語圏を中心に北欧圏や欧米諸国の社会科学、人間科学分野の研究者たちの間に影響力を広げてきている哲学理論である。CRは、経験主義に依拠したこれまでの社会科学の理論的・哲学的基础を批判的に検討し、「超越論的実在論 **transcendental realism**」を新たな社会科学・人間科学の基礎として提示している。CRは、研究者ならば研究過程で必ず逢着する存在論や認識論といった哲学的な諸問題に明確な見解を提示し、具体的研究やその方法論の開拓に指針を与えることを目指している。それは、社会学、経済学、政治学、社会福祉や教育学、ジェンダー論、メディア論、環境論など、多彩な研究領域で応用されてきており、学際的な研究を刺激している。これらの研究者の共同を支えているのは、バスカーの初期の主要著作、『科学と実在論』、式部信訳、法政大学出版局、『自然主義の可能性』式部信訳、晃洋書房である。バスカーは、その後、非実在論の諸哲学を総括的に批判し、**absence** 概念を中心に運動と変化を扱う哲学を提示し、さらに倫理的な問題にまで射程を延ばす議論を展開している。『弁証法』も、近年翻訳刊行された(『弁証法：自由の脈動』式部信訳、作品社)。その後、彼はいわゆる **meta reality** 論など、**spiritual turn** といわれる方向に向かった。バスカーによれば、弁証法も **meta reality** も当初のCRの議論の発展であり、全体として整合するとされている。

CRは、経験主義を前提とする実証主義的な科学哲学の行き詰まりを乗り越えようとする探究から始まっている。CRの議論は、経験されるものを超えた実在についての洞察が起点である。経験主義的科学観では、経験されたものだけが認識対象であり、科学は経験されたもののなかに法則的な連関を見いだすものとみなされる。この議論では帰納問題がアポリアとなる。経験されたものはばらばらな現象にすぎず、普遍的法則は経験的な規則性以上のものではない。ここには自然必然性が存立不可能になる。自然法則は経験的な規則性ではない。経験される現象の背後にある生成メカニズムが特定されて始めて自然必然性が論証可能になる。バスカーは、科学の行っていることの知解可能性が何によってもたらされるのかと問う。その答えは、実験科学の実践の哲学的分析によって与えられる。世界は、経験された世界に閉じてはおらず、世界は経験的なドメイン、出来事のアクチュアルドメイン、そして生成メカニズムの存在するリアルなドメインの3つのドメインに順次深さをもって存在している。経験的な現象からリアルなドメインの生成メカニズムを推定する推論は **retroduction** である。これは、経験的な世界を超える超越論的な推論である。見いだされた自然必然性すなわち生成メカニズムは経験を超えて超事実に実在する。CRはこうして超経験的・超事実的な深部の実在を承認する。経験主義は「認識論的誤謬 **epistemic fallacy**」に陥っている。そこでは、主観的に認知されたものと存在するものとが区別なく一緒になってしまっている。存在するものはそれについて我々が知っているもの、あるいは知覚し

たものことであるとされ、存在についての議論は存在についての私たちの知についての議論に還元されてしまう。CRは、知は知とは独立の対象をもって始めて成立する (referential detachment)。CRは、知を活動・社会的実践ととらえ、概念を知的生産実践のための生産手段と見なす。したがって、知もその手段も意存的 (transitive) なものである。これに対して知の対象は、知とは独立の実在性をもつ自存的な (intransitive) ものである。この両者は厳密に区別すべきで混同してはならない。この考え方から、単純な対応説は拒否される。対象の自存性独立性を承認しつつも、それについての知は人間の実践の生産物であり、可謬的で可改良的なものである。したがって、人間の知はどこまでも相対主義的なものである。こうして、CRは、認識論的相対主義を擁護しつつ、対象の自存性を承認する存在論的実在論を同時に主張する。また、知の対象との関係は実践的な適合性についての合理主義的な判断による。CRは、世界が多くの必然的な関係が複合し偶然的に干渉しあう開放系であることを積極的に主張する。実験は擬似的な閉鎖を作り出すための科学者による世界への実践的な介入なのである。CRは実在性をはかる基準は因果性であるとしている。因果性は実在論の要である。人間の実践力も実在的因果力の発揮である。CRはこの意味で、人間エージェントの行為における「理由の因果性」を承認する。社会は、人間の意識的な行為や人間が環境世界を定義する概念に依存して成立している。社会は実験的閉鎖が特別に困難な開放系である。予測可能性は社会科学の基準にはなり得ず、説明力こそ基準となる。「基礎的CR」ではこの他にも、世界の創発性や階層性、エージェント、実践などについて語っている。

さらに、「弁証法的CR」では、ヘーゲル弁証法をマルクスのヘーゲル批判を参照点にして、唯物論的にまたは実在論的に徹底的に分析批判 (「回折 diffract」) する。それは、1 M (存在の諸相を非同一性や他姓との関連で問題にする)、2 E (存在の諸相を不在と実在的否定・変化との関連で問題にする)、3 L (存在の諸相を全体性との関連で問題にする)、4 D (存在の諸相を人間エージェントの実践的変革力との関連で問題にする) という4つの側面から、それぞれに現れる非実在論についての批判とCRの分析展開を対置している。ここでは、非常に多くの複雑な新しい議論や理論的な概念装置が展開されている。批判的実在論の世界了解の全貌は、弁証法的CRの議論が与えているともいえる。

当日は、これらの議論のなかのいくつかの重要な主張を紹介し、CRが実在論としてどのような問題構成と志向性をもって展開されているかを示すことができたらと思っている。